

教職を目指す学生諸君に一言

著者	田中 陽三
雑誌名	甲南大学教職教育センター年報・研究報告書
巻	2014年度
ページ	41-42
発行年	2015-03-31
URL	http://doi.org/10.14990/00001627

教職を目指す学生諸君に一言

甲南大学教職教育センター 教職指導員 田中 陽三

平成26年度上半期に放映されたNHK朝の連続テレビ小説「花子とアン」は高視聴率をたたき出した。私も毎朝、楽しみにしており、BSで見たあと、地デジでもう一度見ることもしばしばあった。原作者村岡恵理氏が主人公花子を通して発したメッセージのキーワードは「想像の翼」であると思った。なんと素晴らしい響きを持つ言葉なのだろう。本好きの主人公花子が読書を通して想像の翼を広げ、想像の世界を自由自在に駆け巡る。

教育の世界では、児童・生徒の想像力を育もう、ということがよく言われてきた。子どもたちが潜在的に持つ自由な発想や空想を楽しむ心。その心を育む機会が年齢が上がるにつれてだんだんと少なくなってしまう。そして、夢の無い世界に身を置く大人へと大部分の人たちがなっていく現実がある。様々な原因、理由が教育評論家によって語られる。テレビを始めとする押し付けがましい映像文化、電車内で見かける、子どもから大人まで夢中になっているゲームやメール社会等々。そこには想像の翼を使って自由に羽ばたける余地などほとんど見あたらない。

さて、教育の世界では、想像力の伸長が何よりも大切であると思う。例えば、いじめの原因は何か、と問われれば、私は即座に想像力の欠如と答えるであろう。「こうしてこうすれば、こうなる」ことが考えられないのである。こんなことをすれば、嫌がるであろう、とか。ここまですれば、危険が伴い、場合によれば、重大な結果を招くかも知れない等のことが考えられないか、軽く考えていて、そこまで重大になるとは思わなかった云々。私たちの国において、他人の痛みの分からない子どもや空気の読めない大人が増えているのではないか。そうであるならば、重大な危機であり、この国は滅びてゆくのではなからうか。

教職を目指している諸君、皆さんは大丈夫だろうか。想像力の有無は教員としての重要な資質であると私は思っている。心のアンテナを高くして子どもたちの発する情報をしっかりとキャッチすることが大切である、とよく言われるが、情報を掴んだとしても、それをどう分析するのか、また、その上での対応はどうするのか。すべて想像力がものを言うのである。想像力が乏しいと、組織の一員としての教員集団の中で「あの人は空気の読めない人だ。」とも言われかねない。

グローバル化した昨今の社会では、人材育成の重要な要素の一つにコミュニケーション力が挙げられている。勿論、教育の世界では必要不可欠な資質であると思う。では、コミュニケーションにとって大切な要素は何であろうか。私は、「想像力」であると思う。想像力があれば、伝える相手がどのように捉えるだろうかとか、どのようなリアクションが返ってくるかと考えながら児童・生徒や同僚、保護者に向かうであろう。このことが、大切に、これを欠くところらの真意が相手に十分伝わらず、しばしばトラブルの原因となり、問題解決の障害となる。

では、どうやって想像力を育めばよいのだろうか。まず第一に、私は落語を勧める。落語を楽しむためには想像力がものを言う。落語家は扇子や手拭いを小道具に使い、身振り、手振り、声色を使いわけ、身体全体を使って客を想像の世界へと誘う。客は自分の持つ想像の翼を広げ落語家と一体になるのである。うまく想像できないと笑うところで笑いそびれることになる。第二に、新聞を始め書物に親しむことである。「行間を読む」とは、文字にされていない書き手の心情を察することである。また、ラジオから流れる朗読や野球放送を聞くのも良いだろう。要は、押し付けがましい映像を避

けることであり、頭を使って推測、鑑賞することである。

私は、想像力を育む教育にはどんなことが大切なのだろうかと思うことがある。これは外国で見た光景であるが、私の住んでいた田舎では、ブドウ畑が広がり、緯度が高いため春から夏にかけては昼間が長く、家族連れが散歩をしている光景をよく目にした。散歩中、子どもが道ばたで虫か何かの死骸を見つけ、どうなるのかと大人に尋ねる。だが、大人は微笑んで、「明日、また見てごらん。」とでも言うだけですぐに答えを教えない。子どもが自らその答えを見つけるまで待つのである。つまり、答えの導き方を教えるのである。だから、その他のことにも応用できる柔軟性を子どもは幼くして身につけるようになってゆく。一言で言えば、「待つ教育」とでも呼ぼうか。言うまでもなく、保護者や教員などの大人に待つ忍耐力が要求される。子どもたちの発する「何故?」「どうして?」に気長に付き合う寛容さが必要となるのだ。

今の学生はすぐに問題解決の良い方法は何とかか、マニュアルはないのかとか、挙句の果てには答えをすぐに求める傾向が強い。しかも、権威による解答を求める傾向がある。そんな時、私は、「良い方法なんて無い。何度も繰り返しやっているうちに、自分に合った方法が見つかる。それが一番良いやり方である。」と答えることにしているし、実際、その通りであると思っている。ろくに苦勞をしないで良い方法を知りたいなんて虫が良すぎる。

余談になるが、ファッションセンスを磨くこんな話を聞いたことがある。それは、私がフランスに滞在中のことだった。フランスの若者は我が国の若者と比較して、総じて小遣いを多くもらえないし、アルバイトでもそれほどお金を稼げない。だから、そんなに服装にお金をかけられない。でも、年頃になると、自分の持っている服や小物を姉妹で取り換えっこして、選択肢を増やすのである。例えば、デートの時など、自分のパンツに姉のジャケットをコーディネートするのである。そ

して、スカーフでバッチリきめる。そんなに多くの服を持ってないから、考え悩んであれこれと思い（想像の翼）を巡らすのである。どこかの国の若者のようにテレビや雑誌のアイドル達が身につけている高価なものを安直に真似したりはしない。自分に合ったものを自分で編み出すのである。当然、自分に似合うものを知っている。物が無いとはなんと素晴らしいことなのだろうと考え直すことである。無いことによって、人は恵まれることもあるのだ。

そういえば、子どもの玩具にも同じことが言えるのではないか。物があり溢れて、お金さえ出せば手に入る画一的な玩具より、手作りの自分だけの物で遊ぶ方が子どもの想像力や創造力を育むのではないか。「子どもは遊びの天才である。」という言葉がある。だから、教職に就いても、やれ電子白板が必要だとか、パワーポイントが無ければ良い授業が出来ないとか言っているのは駄目で、普通教室にはそのような設備はほとんど無いのが現状であろう。私の経験からいうと、自分で手作りの補助教材を作っていればこそ、高価で便利な補助教材も十分に生かせるようになるものなのだ。

これから教職を目指し、努力している学生諸君、是非、自らの現状を分析しつつ、自分の夢の実現には何をすべきか考えることだ。夢が叶った暁には、「想像の翼」を広げ、子どもたちの想像力を育む授業にチャレンジしてくれることを望む。